

DC開発フォーラムBBL  
3月29日(火)

『アフリカ・アジア貿易投資の動向分析と今後の意味合い』  
吉野 裕氏 (世界銀行アフリカ地域総局)

---

プレゼンテーション資料：  
<http://www.developmentforum.org/records/material/050329AATI.ppt>

参考資料  
<http://www.worldbank.org/rped> に掲載

### 【冒頭プレゼンテーション】

#### 1. バックグラウンド

- ・2004年11月に開催されたTICADアジア・アフリカ貿易投資会議(AATIC)にて、世界銀行(以下、世銀)からアジア・アフリカの貿易の現状についてのレポートを発表した。2003年初頭から、当時世銀アフリカ局におられた豊島俊弘氏(現、日本政策投資銀)を中心に調査に取り掛かり、2003年の第3回アフリカ開発会議(TICADIII)でも初期結果を発表した。
- ・AATICにはアジア、アフリカから合計78カ国参加、うちアフリカからは43カ国。メインの参加者は貿易投資担当の高級官僚。一部アフリカ諸国からは大統領も参加した。

#### 2. なぜアフリカの貿易か？

- ・アフリカには重債務国が多く、よってHIPC(重債務貧困国)イニシアティブが取られている。HIPCにカテゴライズされている38カ国中32カ国がサブサハラアフリカ諸国である。HIPCのクライテリアとして、貿易(輸出)と債務の比率があり、重債務国から抜け出すためには貿易量を増やすことが重要であるといえる。
- ・貧困緩和、民間セクター主導の開発などに貿易が果たす役割は大きいと考えられ、直接投資もまた貿易によって引き起こされる側面が強い。さらには、アフリカ諸国の多くにおいては自国市場が小さすぎるために、地域統合を進め、また域外市場までアウトリーチしていかない限り、成長の機会は見出しにくい。
- ・よって、アフリカの成長のためにはまず貿易ありきであると考えた。

#### 3. なぜアフリカ・アジアの貿易なのか？

- ・今までアフリカにとってアジアは経済活動という意味では、弱い結びつきしかなかった。アフリカはヨーロッパとの歴史的なつながりが強いし、コトヌ協定、Everything But Armesイニシアティブ、近年のEPAといった貿易措置もある。またアメリカもAGOA(アフリカ成長機会法)を通じてアフリカ産品に対する関税特恵措置が近年の注目である。しかし、アフリカとアジアは昔から政治的な結びつきがあった。東西間の冷戦時の非同盟諸国の運動として、1955年にはバンドン会議でアジア・アフリカ間の政治的協力が推進された。また、近年ではアジア・アフリカ協力を一つの柱とするTICADイニシアティブもある。
- ・一方、近年では、アフリカからアジア向けの輸出額が増加傾向にあり、経済的な結びつきを考える機会が出来てきた。アフリカからの輸出先として金額ベースでは、EUのシェアは53%、アメリカは19%、アジアは16%である。ただしアフリカの対アジア輸出は90年代を通じて急増してきており、

年平均10.1%で増加。どの他の地域よりもアジア向けの輸出が急成長している。同時に、アジアの輸入ということで視点を移してみても、では域内貿易が活発であるものの、それ以上にアフリカからの輸入の増加率が高くなっている。

#### 4. マクロ・セクター・レベルの動向

- ・世銀レポートの分析では、マトリクス・アプローチをとってみた。例えばアフリカの輸出構造を把握するためには、産品部類(行)×仕向地(列)の輸出マトリクスを作成し、一つ一つのセルにアフリカ輸出全体におけるシェアと年間平均成長率を書き込む。これにより、どの輸出先のどの産品グループが、アフリカにとってウェイトが高いのか、あるいは高い伸びをしめしているのか一目で把握できる。(世銀の調査プロジェクトでは、このようなマトリクスを用い、輸出入双方の構造を、地域レベルおよびアフリカ53ヶ国個別に分析した。)
- ・このアフリカ輸出マトリクスを見ると、輸出先としては、EUのウェイトが高い。一方、成長株ということ考えると、品目としては、対EU向けには工業製品、対アジアには一次産品の輸出が90年代を通じて増加した。
- ・アジア向けの輸出品目としては、原油が金額ベースでは全体の3割を占めているが、これは輸出先全体としての傾向。ただし、中国などへの輸出増加が著しい。
- ・アジア向けには一次産品輸出が主要であるが、決して原油といった鉱物資源のみではない。農産物、食糧輸出も主要輸出品目であり、特に中国、インドへの伸びが著しいことが分かる。

#### 5. アフリカの対アジア輸出: Market diversification

- ・一次産品への依存がアフリカの輸出構造の問題であることは、これまでよく指摘されてきたことであり、そのことから、輸出産品における輸出構造の多様化(diversification)ということが通例の政策処方箋であった。これは確かにvalidな議論であるが、同時に輸出マーケットのdiversificationということも考えられるのではないだろうか。その意味で一次産品とてアジアに新たな顧客ベースを見出すことにより、もう一つのdiversificationが可能になろう。一次産品依存の輸出構造の問題として、一次産品の抱える需要の所得弾力性の低さということがよく議論されるが、確かに輸出先として先進国市場のみを考えれば、一次産品の需要の伸びには限界があり、アフリカにおいて付加価値を増すこと無しには、輸出をテコにした成長戦略はないし、世界価格の変動に左右され、マクロ経済への影響が深刻である。しかし、新たな市場開拓、カスタマー・ベースの拡大ということで、特に経済成長が著しく、高い所得弾力性をもつマーケットへの売り込みを。世銀レポートでは、例えばコーヒー豆の一人当たりの輸出量と一人当たりのGDPを、アジア諸国のデータをベースにプロットしてみたが、綺麗にインド、中国の高い所得弾力性を表すことができた。

#### 6. 需要と供給

- ・また、アフリカの輸出の供給キャパシティとアジアの需要ポテンシャルがどの程度マッチするのか分析をした(アフリカ・アジアの二国間の貿易相性判断)。すると、いくつかの産品グループごとにアフリカのサプライとアジアの需要がマッチすることが判明。例えば:
  - オイル: アンゴラ、コンゴ、ナイジェリア、スーダンからインド、韓国、日本へ
  - 金・ダイヤモンド: ボツワナ、ガンビア、シエラレオーネ、南アからインドへ
  - シーフード: モーリタニア、セネガルなど西アフリカから日本、香港へ
  - 綿: 西アフリカ(ベナン、マリ、トーゴ、チャド)からタイ、パキスタン、フィリピン、インドへ
- ・なおアフリカの貿易をマクロ・レベルで議論すると、よく先進国の市場アクセスが問題とされる。単純に関税率をMFN(最恵国)レートのみで見ると、日本は低く、シンガポールはゼロであるが、インドや中国はまだ非常に高い関税を設けている。また「tariff escalation」といって、プロダクトの加工度が高いほど関税率が高くなるのは、アジア諸国も他国と同じである。それにもかかわらずアフリカからの輸入が増加していることも現実である。

- ・また、関税以外のアジア・アフリカ貿易障壁として、物理的な距離あるいはロジスティカルな距離がある。例えばアフリカから他地域への航空旅行距離を求めた。アフリカの各都市からアジア各都市まで飛行機で飛んだ場合の、待ち時間、飛行頻度も勘案して算出。アジアは非常にやはりアジアはEUに比べると「遠い」で世界(しかし、アフリカ地域内の都市間のほうがもっと「遠い」場合もある。)
- ・以上の市場アクセス、距離といったものを考慮すると同時に、やはり需給関係、市場メカニズムとすることを把握することの重要性が感じられる。

## 7. 貿易・投資のリンケージ

- ・アジアのアフリカへの投資促進といったことを考えるときに、やはり投資が如何にprofit-makingに結びつくのかということを見ると、アフリカ諸国の輸出可能性とリンクさせて考慮する必要がある。ということで、以下の三つの概念系に整理して考察してみた。
  1. アフリカの対アジア向けの輸出製品への生産投資。主に、天然資源、農業、食料産業、など。
  2. アフリカが域内の他国への輸出製品への生産投資。消費者製品やサービス。かつては直接投資が盛んだったが、政治不安や市場の小ささのために、現在ではライセンスやフランチャイズが主流となっている。(例:住友化学のオリセット、蚊帳の生産を現地にライセンス。企業の社会的責任の観点からも注目される。)
  3. グローバル市場用投資。自動車、衣類など。アジアから部品を輸入して工業品生産をし、それをEUやアメリカに輸出。

## 8. ミクロ・データにみられるアフリカの対アジア輸出企業

- ・ではアフリカの個々の企業によるアジア向け輸出はどうなっているのか、アフリカの企業育成にどのように結びついているのかをみるために、企業レベルのミクロ・データということで、世銀の投資環境評価(ICA)データからみられるアフリカの対アジア輸出を分析してみた。既にデータが揃っている東南部6カ国(エチオピア、エリトリア、ケニア、タンザニア、ウガンダ、ザンビア)のデータをみると、アフリカ企業の三分の一が輸出を行っているが、その多くがアフリカ域内に輸出をしている。
- ・輸出先への特化度をみると、アジアに輸出している企業はアジア以外にも輸出している企業が多く、アジア特化型企業は少ない。
- ・生産性(total factor productivity)をみると、アジア向け輸出をしているアフリカ企業の生産性は非常に高いが、これは輸出品目のセクターの性格もあるので、一概に何か言うことはできないだろう。(特にアフリカ域内および対アジア向けには化学、金属があり、資本集約型の産業については、資本のインプットがunderestimateされる傾向にあり、企業レベルのtotal factor productivityがoveresimateされる。)ただ、同時に対アジア輸出企業については、アフリカの域内貿易との企業レベルでのリンケージが強いという事実を示していることにもなる。
- ・投資環境ファクターとしては、アジアへ輸出している企業は、他地域への輸出企業に比して、輸出入とも税関手続きに障害をより強く感じているようである。

## 9. 今後の取組

- ・アフリカには輸出振興に関して積極的な働きかけが必要であるといえる。そのためには、グッドガバナンス、インフラ整備、投資環境整備、キャパシティビルディング、地域内経済統合などが不可欠となってくるだろう。
- ・アジアとしては、高関税の見直し、運送コストや取引費用の改善、アフリカの企業をアジアにもっと紹介していく、など。
- ・今後のフォローアップとしては、“Africa – Asia Who’s Who”のようなビジネスディレクトリ(プレイヤーのidentification)の作成、アフリカの企業レベルの調査、アジアのアフリカに投資する投資家の調査、などが考えられる。また、色々な基準(衛生、安全、など)の問題もあるが、それに関してはニッチを探していくことが有効であると思われる。今後は社会的な側面も取り混ぜた世界基準が進行していくので、それに合わせたキャパシティビルディングが不可欠となるだろう。
- ・また、アフリカの民間セクター開発戦略、輸出振興戦略としても、地理(内陸国、沿岸国、資源国な

ど)の考慮が非常に重要であろう。その中で、アジアを一つの切り口とした場合の地理的インプリケーションを継続的に分析する要あり。また、人的リンケージも大切(特に印僑リンケージ)。

#### 【席上の意見交換】

・貧困削減と成長の関係。ただ単にpercapita incomeを増やすことが、どのように貧困削減につながると考えるか？

貧困削減するために成長がいらぬかといったらそうではない。あくまでも全体のパイを増やさないと一人一人のシェアは増えない。衡平の問題(所得分配)はあるが、成長がないと国内政治的にfeasibleではないので成長は不可欠であることには間違いないといえる。

・輸送費用に関してのデータは欠乏が多いとも思われるが、それもどの程度貿易に影響を与えていると思うか。

グラビティモデルを使って、貿易量がどの程度距離や市場開放度、言語などフリクションのファイターに影響されるかについて調査した。工業製品については距離が非常に大きな影響を与えている。これはEUだと低く、よって工業製品はEUにいく。データの緻密度が低いので、まだ分析の余地がある。一次産品に関してはフリクションにはあまり影響を受けていない。

・アフリカの地域統合は30年ほど前あたりから言われており、少しずつだが、AUやNEPADなどが進んできている。それについてどのように考えるか。

エスニックネットワークがどれほど有効に働くかを今後調べたい。アジア・アフリカだけではなくクロスボーダーのインフォーマルな貿易のダイナミズムを利用して成長につなげられないかと思っている。世界銀行アフリカ局でも、ICAやその他の調査活動一般について、インフォーマルセクターを考慮するというところで戦略作りが始められている。フォーマルで国家間の政治的・法的な側面(例えば関税率の撤廃など)、またハードな側面としてのインフラ整備(特に交通インフラ)があるが、他方で、ビジネスのネットワークがあり、相互作用があって前向きに進んでいくと思う。

・世界銀行のオペレーションにのせてアジアアフリカの貿易投資を進めていくにはどうみているのか？

地域的なオペレーションはまだ難しく、今はまだ調査の段階。それから徐々に政策策定をしてオペレーションに落とししていければと思う。

・IFCでは投資環境が全てであり、ポリティカルウィルが大きく作用すると思われる。TICADでアフリカ政府高官にもメッセージは伝わっていると思うが、政府上層部で本気を出して買えるような動きにつながるかどうか。

アフリカ政府のポリティカルウィルが鍵であろう。これがTICADでどのように進んでいくのかは、当方が知る限り、見えていることではない。

・アフリカ開発のモデルについて簡単なコメントを。アジアの発展経験とは違うと思うが。

インフォーマル・セクターの部分をもっと拾っていくのではないかと思う。例えば、現在、当方がかかわっているニジェールのSources of Growthについての調査プロジェクトは、世界で二番目に貧しく、いまだに奴隷の慣行が残るとも言われるニジェールが、如何にウランだけに頼るのではなく、もっとLivestock、玉葱、豆といった農産物を域内(ナイジェリア、コートジボアールなど)に輸出し、西アフリカの域内食

料自給に貢献するか、それをジェールとしての経済成長の源泉とできるかどうかということ、サプライ・チェーンやマーケット需要を軸にフィールド・データの收拾を行い、計量的に分析している。既にナイジェリアへの輸出はあるが、問題はそれがまだインフォーマルなレベルであり、関税統計には表れないということがある。それをいかにフォーマルにして数字にして政府に提示できるかが重要になっていくのではないか。

・中国とアフリカは遠いが、それでも貿易が増えている。中国からみたメリットはなにか？  
中国にとってアフリカの重要性は強くはなかった。しかし、近年中国の経済成長が顕著になってきており、たとえば農産品の全てを国内調達できないときにアフリカに目を向けて輸入する、などという動きが見られる。

・中国印度日本韓国を除いたアジアで伸びている国は？  
中国以外ではASEAN全体も伸びている。特にインドネシア、マレーシアなど。

(以上)